

## 古英語の本文批評と *Beowulf* (12)

網 代 敦

今号から取り組む主題に入る前に、前号まで取り扱ってきた諸論考に続き、新たにもう一つだけ論を加えておく。

### 2016: Leonard Neidorf (I)

Neidorf 論<sup>248</sup>の趣旨は、Eduard Sievers が *Altgermansiche Metrik* (Max Niemeyer, 1893) で唱えた体系的な古英詩の韻律理論—“standard verses consist of precisely four metrical positions, with each position corresponding to a long stressed syllable, a resolved sequence of a short syllable and its successor, or a variable sequence of unstressed syllables” (Neidorf, p.52)—を、古英詩の本文批評に適用することの再主張である。この Sievers 論は古英詩の本文批評、特に ‘unmetrical verses’ の標準形への修正において画期的な役割を果たしてきた。古英詩はかなり規則的韻律パターンに従っているという理解のもとでの本文修正である。しかし一方で、写本の読みを尊重する保守主義の校訂者は、この ‘unmetrical verses’ を「変則」と見なすのではなく、詩人独自の意図の表明とし本文をそのまま保持する傾向がある。韻律が作品の本文上の歴史に対して必ずしも信頼できる洞察を与えてくれるものではないという考えであり、Busse (1981)<sup>249</sup> あたりがその論の出発点となっている。この

---

<sup>248</sup> ‘Metrical Criteria for the Emendation of Old English Poetic Texts’ in *Old English Philology: Studies in Honour of R.D. Fulk*. Ed. by Leonard Neidorf, Rafael J. Pascual and Tom Shippey (Cambridge: D.S. Brewer, 2016), pp.52-68.

<sup>249</sup> 網代敦「古英語の本文批評と *Beowulf* (9)」大東文化大学英米文学論叢第

ような姿勢に対し、異論を唱えてきたのが、本文修正派の Fulk である。例えば Fulk (1996)<sup>250</sup> は古英詩の韻律を統計的な基礎として客観的に考慮する方法を本文修正に適用し、‘unmetricality is a sign of scribal error’ (Neidorf, p.53) と断定する。Neidorf はこの Fulk の論を支持し、古英語の詩人は故意に ‘unmetrical verses’ を生み出したのではない (p.53) ことを実証しようとしている。以下 Neidorf の見解を追ってみよう。

先ず、複数の写本が残されている *Soul and Body* や *Solomon and Saturn*、また共有の一節を含む *Daniel* と *Azarias* などを取り上げ、対応する箇所本文異同を確認している。複数の写本が互いに同一の ‘unmetrical verses’ を保持しているなら、その ‘authenticity’ は強い傾向にある。一方、写本照合によって ‘unmetrical verses’ が写字生の誤りであることが一貫して認められるなら、アングロサクソンの詩人は韻律規則を破り ‘deliberately composed verses’ を与えることは考えられないとする。(p.54) Neidorf は、‘Three-position verses’、‘Five-position verses’、‘頭韻」などの項目を検討し、一方の写本において、「一文字の脱落」、「二語を複合語とする形態上の変化」、「ある語を語形が似通ったものに捉えてしまう書記上の誤り」、「一語の抜け落ち」、「接頭辞・前置詞の付加」、「重複誤写」、「頭韻の欠如」、「語順の反転」などの ‘unmetricality’ が写字生の間違いに起因するものであることを認めている。(pp.55-60) 次に、‘genuine unmetrical verses (p.62)’ なるものが存在するののかという疑問を發している。そのようなものが、複数の写本に共通してあるというのなら、その存在を肯定してもよいが、Neidorf の調査からはその可能性は低いことが報告されている。

結論として、‘metrical defects’ と ‘scribal error’ には強い相関関係がある (p.63) とする。それ故、‘verses that violate formal expectations’ は、

---

45号 (2014), pp.61-70 を参照。

<sup>250</sup> 網代敦「古英語の本文批評と *Beowulf* (10)」大東文化大学英米文学論叢第46号 (2015), pp.45-51 を参照。

‘textual corruptions’ではなく‘marks of literary sophistication, reactions against an inherited tradition, and expressions of a poet’s unique subjectivity’であるという‘aesthetic assumptions’は、古英語文学の研究には適用性がないと断定し、韻律学の客観性をもっと重要視されるべきであるとす。 (p.64) 現在において、古英語の本文批評の姿勢は写本の読みを保持する傾向にある。しかし、Neidorf論は一方に偏らない本文批評のあり方の再考を促したものであると言えよう。

\*       \*       \*       \*       \*

次に、ここからは *Beowulf* に特化して、その本文批評の近年の議論の展開を見ていくことにする。但し、これまで刊行されてきた *Beowulf* の各種校訂本の中で取り上げられている校訂者の本文批評の姿勢については、今後、歴代校訂本の各特徴を改めて通史的に取り扱う際に触れたいと思う。また、拙論 (1992)<sup>251</sup> の中で、Hoops (*Kommentar*, 1932)、Hoops (*Beowulfstudien*, 1932)、さらには Westphalen (1967) を中心に Bouterwek (1859) からの *Beowulf* における本文批評の動向については既に述べたので、今回はそれ以降の主だったものを対象としたい。

### 1972: Gerhard Nickel (C)

Holthausen の *Beowulf* 8 版 (1948) の改訂を行うに当たって、予備的な作業が Carl Winter 出版社との共同と *Deutsche Forschungsgemeinschaft* の支援を受け、1964 年 Kiel において Nickel の指揮のもとで始まった。この作業は、Erlangen の H. Matthes 教授によってすでに開始されていたのだが、突然の彼の死によって中断された。その後、このプロジェクトが Nickel に受け継がれ、彼と J. Klegraf、W. Kühlwein、D. Nehls、

<sup>251</sup> 網代敦「*Beowulf* の校訂本について (2)」大東文化大学紀要第 30 号<人文科学> (1992) pp.120-6. 尚、Hoops (*Beowulfstudien*, 1932) については、拙論「古英語の本文批評と *Beowulf* (7)」(2012, p.76) も参照。

J. Strauss、R. Zimmermann らのチームによって、彼らの新しい校訂本が Stuttgart 大学で完成を見た。本論<sup>252</sup>は、その編集作業を通して得られた結果の報告で、編集上の問題点を概観することが目的となっている。(p.261)

以下、各項目に従ってその主眼点を述べていこう。

方法 (pp.261-2)—修正と推測を強く好んだ Holthausen 版の本文を全面的に改訂する際に、できる限り(写本に)現存する読みを尊重し、重要な本文外 (extratextual) の考慮によって、写本の読みの変更が求められるような場合においてのみ、修正・推測を行うことを原則とした。また従来の校訂本と異なるところは、第一に、複合語の取り扱いに関わる問題と文の従属・並列的順序 (hypotactic-paratactic ordering of sentences) の問題に焦点が置かれていることである。さらに、写本の書記上の語形と編集されるべきテキストとの関係が再考され、この点が本論の主題となっている。

Thorkelin A と Thorkelin B の取り扱い (p.262)—Nickel はこれまでのほとんどの *Beowulf* の校訂本は、ファクシミリ版の写本中にまだ見られる読みと、Thorkelin A・B のものに帰せられる読みとの間の相違を明確に区別できていないと見る。Thorkelin 自身の手による Thorkelin B は、その転写の中に、解釈的な要素が多々導入されており、転写に際し、彼の古英語における意味論・統語論・形態論の専門知識が、書記要素の解釈に当たり先入観を与えてしまっている。一方、Thorkelin A は専門知識のない写字生による転写本であるので、かえって書記上の解釈には 'objectivity' が Thorkelin B よりも強く認められる。これらをどのように校訂本に組み入れていくかが問題となる。Nickel らは、二つの転写の読みの中に相違が生じている場合は、再構成された本文が基づく方の転写を示す試みをとった。これは従来

---

<sup>252</sup> 'Problems of *Beowulf*-Research with Special Reference to Editorial Questions', *Neuphilologische Mitteilungen* LXXIII (1972), 261-8.

の校訂本と異なるところである。その意図は、今日一般に受け入れられている読みは単に転写の読みの方の採用に基づくものか、あるいは両者の組み合わせに基づくものであるということに注意を向けると同時に、本文の全節が必ずしも一様に信頼できるとは限らないことへの注意を読者に促すことである。

**写字生の慣習** (p.263)—これは本文校訂の際に重要な要素として関わってくる。Nickel はここで *Westphalen* の例を挙げている。*Westphalen* は、解釈が古英語の統語論・形態論・意味論の卓越した知識によって導かれる時でさえ、どれほどの体系的な対応がさらにまだなされ得るのか、またどのような偏った解釈の結果が生じるであろうかということ、損傷の多い短い一節 (3150-55) を例に、再構成しながら明らかにした。解釈が困難とされてきた節を取り扱う際の修正基準は、ストロークが類似している文字同士を交換するという方法によって獲得され、余地のある文字間の空きを計り、修正された文字の分布・広がり注目するということが重要であるとされた。

**複合語の取り扱いの問題点** (p.263-4) 一次に、Nickel は複合語の問題を提示している。書記上分割して書かれている語同士が、複合語であるか否かは韻律的な基準によって決められてきた。主要ストレスは複合語の第一要素に置かれ、それがしばしば頭韻を構成するものである。この韻律に関わる特殊な文体的特徴がしばしば修正を生じさせてきたが、韻律的な基準が複合語化のタイプを決定する上で有益であるとは確信して言えることではないとした。

**複合語分析の適用** (p.265)—R. B. Lees (*The Grammar of English Nominalizations*, The Hague, 1964) の複合語分析の方法を、Nickel との共編者である Klegraf が *Beowulf* の複合語分析に応用している。Lees の複合語の分類法は、その二つの要素間の統語的關係を見ることを出発点として、仮説上の基本構造を設定した。そしてそれから派生する 49 の複合語のタイプがあることを提示し、この方法に従い文法的に正しい複合語を生み出している。古英語のコーパスの少なさなどの事実に

より、この Lees の現代の理論の適用は絶対的に決定的なものとは言えないが、従来の複合語の各要素を客観的な基準によって判断することのなかった方法よりも実りが多いと言えるとし、その方法論に依拠したことを明示している。

**新しい観点** (p.266) — この新版となる *Beowulf* の校訂本では、(1) 通常の複合語化の規則から形態上著しく逸脱した複合語を検討する、また、(2) 形態上逸脱してはいないが、それを複合語だと想定したことによって、他の統語関係を遮断してしまっていないかどうか、これらの点を調査し新しい読みを与えた。統語関係による分析が必ずしもいつも正しいとは言えないが、写本本文を害することなく、従来の伝統的な方法を新しい批評的分析のもとに組み従えた。

古英語の形態や統語の分野において、新しい言語学的な研究が進むにつれ、それらの手法が本文批評に反映されていく、その一つの実践が Nickel らによる新版ということになる。

### 1981: Kevin S. Kiernan (C)

Kiernan の説<sup>253</sup> に関しては、拙論 (註 251, 1992, pp.131-3) において既に述べた。ここでは改めてごく簡単にその要点に触れるだけとし、詳しくは拙論 (1992) に譲ることにする。歴史的にも言語的にも鑑みて、*Beowulf* のオリジナルとその写本は初期 11 世紀に制作されたこと、また本文の前半の転写を行った第一写生字と、後半を担当した第二写生字 (詩人自身でもあるとする) は転写後に校閲を行っていること、後者は前者のものも校閲していること、よって写本はかなり信頼できるものであり、現代のテキスト校訂者が本文修正を施す必要性は認められないというものである。上述の Neidorf や Fulk が韻律や頭韻の立場から、その「不規則性」が認められる場合は、‘scribal error’ と

---

<sup>253</sup> Kevin S. Kiernan, *Beowulf and the Beowulf Manuscript* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1981).

し本文修正を積極的に支持したことに対して、「不規則性」を ‘intelligent variation rather than scribal corruption (Kiernan, p.185)’ と見なし、特に頭韻が本文修正の上での決定的要素にはならないという否定的立場を採っている。かなり強い本文に対する保守主義を提示している。

### 1982: Taylor-Davis (C)

この論文<sup>254</sup>は、*Beowulf* 写本に見られる頭韻の欠損・不成立箇所(‘alliterative misfits’)において、校訂者による修正が適切であるか否かを検討したものである。Taylor-Davis の見解は否定的である。彼らは冒頭でこのように述べている。

何世代もの *Beowulf* テクストの编者たちは、学生用にしろ研究者用にしろ読みの問題が最小限に抑えられたテクストを写本から作ってきた。写本の欠損部は ‘editorial addition’ によって修復されてきたが、写本の権威は编者たちの手に委ねられてしまった。(但し) この権威は疑問を呈する多くの根拠がある。一つには本文の「改善(‘improvement’)」あるいは「完成(‘perfection’)」はその「修復(‘reparation’)」または「修正(‘emendation’)」とは異なること、もう一つは、修正は(正当化するために)あまりにも解釈に頼り過ぎていることである。・・・読みが困難な本文を現代の読者に理解しやすいようにした入念な本文研究は尊重されるべきではあるが、できるだけ受容された写本の読みに近いテクストの方が好ましい。(p.614)

この言明に続けて、*Beowulf* テクストの写本形を研究すればする程、编者による修正は ‘a superimposed text’ を生み出してきたということを一層感じ取るようになった (p.615)、と述べている。

次に Taylor-Davis は頭韻の不成立箇所において従来なされたきた

---

<sup>254</sup> P.B. Taylor and R.E. Davis, ‘Some Alliterative Misfits in the *Beowulf* MS’, *Neophilologus* 66 (1982), 614-21.

「(頭韻の)修復」の再検討を行っている。特にその対象になったものは、‘the pairing of an *h* plus vowel with a stressed syllable beginning with a vowel in the other half-line (p.618)’ の場合である。母音構成の頭韻を生み出すために、‘an *h* plus vowel’ の音結合の ‘*h*’ を削除してしまう「修復」を問題視している。例えば以下の用例を引き合いに出している。(1) と (2) は ‘an *h* plus vowel’ からなる同一の語を含んだ写本の読みである。

(1) eald ond egesfull hond slyht ageaf (2929)  
ealdum ceorle hond slyht giofan (2972)

(2) Heo him eft hraþe handlean forgeald (1541)  
yfla gehwylces hondlean forgeald (2094)

現代の校訂者たちは、「規則的な」頭韻構成にするために、(1) の ‘hond’ を ‘ond’ に、(2) の ‘hand-’, ‘hond-’ もそれぞれ ‘and-’, ‘ond-’ に変更している。(1) に関し Taylor-Davis は、写字生が同一の hond slyht という語を比較的近接して置いたことは、写字生自身は何を転写しているかを認識していたとし、間違いを繰り返してしまったとは考えられないと断定している。また hond slyht (文字通りの意味は ‘hand-slaying’) のままの方がより良い意味をなしているとする。(p.618) (2) に関しては、handlean / hondlean はそれぞれ異なる写字生によって転写されており、それだけに誤記による転写の可能性は低いと考えている。(p.618) この場合、‘*h* plus vowel in a stressed position is allophonic with a stressed open initial vowel (p.618)’ と述べて写本の読みを尊重している。「頭韻を規則化する「修正」は本文を「修復」することでもないし、必ずしも意味を明確にすることにもならない。このような「修正」は本文の意味を変更してしまうし、そこに解釈を押しつけることになる (p.620)」との警告を与えている。

**1990: Hoyt N. Duggan (一)**

先の Kiernan (1981) の主張に見られるように、「写字生は自己の転写に自らの修正を施している」と認められる証拠をもとに、写本本文に介入しない姿勢を正当化し、その必要性を尊重する研究傾向が現れてきている。数量的に示された証拠として Westphalen (1967) によれば、第一の写字生は 51 箇所、第二の写字生は全体を通して校閲し 37 箇所の修正をなしているとされている。削除にも注目すれば、Kiernan (1981) は 90 箇所以上のその存在を見出しており、これらの証拠から、従来の 'editorial emendations' に反映されてきた写本本文には高い割合で誤りがあるという考えを否定し、写本の信用性を強調した。この主張に対しては、各方面からいろいろな異論が提示された。Duggan (1990) も<sup>255</sup> もその一つである。

Duggan は、Kiernan の写本本文に関する論考に対し、そうであるからと言って写字生が 'exemplar' の正確な 'copy' を作成したことの証とはならないと異を唱えている。写字生が「どの間違いを正したかは判断できるが、どの間違いを正さなかったかは知ることができない」し、写字生が 'exemplar' を正確に再生したと想定するにしても、写字生の 'copy' がどの程度正確に詩人が書いたものを反映しているかも、知り得ないからである。(pp.217-8) *Beowulf* の二人の写字生が用いた 'exemplar' の本文の信用性 ('reliability') の証拠が欠損しているので、写字生が修正したテキストは信頼できるとは言えないということから、写字生が行った修正や削除の数量が 'conservative textual arguments' を支持する根拠にはなり得ない (p.219) と、手厳しい見解を与えている。

---

<sup>255</sup> 'Scribal Self-Correction and Editorial Theory', *Neophilologische Mitteilungen* 91 (1990), 215-27.

### 1983: 酒見紀成 (C)

酒見論文<sup>256</sup>の目的は、「テキストの読みについて問題のある箇所を一つずつ取り上げ、提案されている様々な読みを列挙することによって、『ベーオウルフ』の本文がいかに不安定なものであるかを示すと同時に、問題点の再整理を行おう (p.214)」ということである。主に使用された校訂本は、Klaeber (1950), Dobbie (1953), Chambers (1968), 鈴木 (1972), Wrenn-Bolton (1973), Swanton (1978) であるが、特に Dobbie (1953) の Notes が参考とされた。本論では 188 行までを扱っている。これらの校訂本の照合を通して「写本の訂正 (emendation) が比較的安易に行われている (p.230)」ことを指摘し、写字生の誤りが明確化されないうちは保守的校訂を重んじる姿勢を支持すべきであるとしている。

### 1984: 酒見紀成<sup>257</sup> (C)

1983 に継続するものである。前号は、188 行までの本文における問題のある読みを個々に取り上げ、各校訂本間の異同 (それぞれ提案された解釈・修正) の列挙により、「本文の不安定さ・本文確定の難しさ」を示したものであった。今号では、189 行から 370 行までについて、「問題点の再整理 (p.33)」が主眼として行われた。具体的には、Dobbie (1953) の Notes には組み入れられなかった新しい校訂本 (例えば Swanton, 1978) や雑誌論文などに提案された解釈を参照しながら、Notes を一層新しいものにしようとする試みがなされている。

### 1986: 酒見紀成<sup>258</sup> (C)

---

<sup>256</sup> 『ベーオウルフ』の本文批評のために『言語学論叢：関本至先生古稀記念論文集』(広島文教女子大学英文学会刊)(広島：溪水社, 1983), pp.213-31.

<sup>257</sup> 『ベーオウルフ』の本文批評のために(二)『広島工業大学紀要』18 (1984), pp.33-43.

<sup>258</sup> 『ベーオウルフ』の本文批評のために(三)『広島工業大学紀要』20 (1986), pp.1-13.

前号と同じ趣旨で、371行から558行までが検討されているが、次の3点(p.1)が特記されている。(1)どの校訂本にも採用されている写本本文の復元形が誰のものか、また異説の併記、(2)19世紀には安易に写字生の誤写や省略とみなされて本文修正が行われたが、近年は少なくなったこと、(3)本文に問題がないものの解釈や翻訳における異同の問題(特に句読点の異なりによる)。また新たに、Stevick (1975)、Chickering (1977)の校訂本が加えられている。

### 1994: John D. Niles (C)

*Beowulf* 編纂上の原則を提示するに当たり、Thorkild Knudsen (1976)<sup>259</sup>が、「歴史的教養ある文化の文脈で理解すると意味がないものが、伝統的な民衆文化の文脈に置かれると素晴らしく純粋なものになる」と述べたことに注目したのが、Niles (1994)<sup>260</sup>である。アングロサクソン詩は学識ある作者によって創作されているので、その作品がKnudsenの言明にいつも対応するとは考えられないものの、‘a learned perspective (p.441)’の点から見ると、文体的特徴が時折「変則的」と思われるものがあり、これらの古英語テキストはKnudsenの指摘と関わり合う面を持っている。*Beowulf*, *Waldere*, *the Finnsburh Fragment*, *Widsith*, *Deor*, *The Wife's Lament*, *Wulf and Eadwacer*のような詩はBedeやAlcuinの精神世界の文脈で読んでみると、知的・文体的に一貫性に欠けるが、‘a native tradition of oral narrative verse (p.441)’の中で見ると、はっきりした透明性のある作品となる。このことを念頭に入れると、明らかに学識的な背景のない古英語のテキストを刊行

<sup>259</sup> Thorkild Knudsen et al. (eds.), *Danmarks gamle folkeviser: Melodier*. Vol.11. (Copenhagen: Akademisk forlag, 1976), p.73.

<sup>260</sup> ‘Editing *Beowulf*: What Can Study of the Ballads Tell Us?’, *Oral Tradition* 9 (1994), 440-67. 尚、Nilesのこの論文については、網代敦「*Beowulf*の本文をめぐる問題点と諸校訂本について」、唐澤一友(編)『忍足欣四郎先生追悼論文集『ペーオウルフ』とその周辺』(春風社, 2009), pp.389-408の中でも取り上げた。

する際は、編者は詩の本来の荒削りな特徴 ‘ragged or rugged features (p.443)’ を、規範 (norm) という面を重んじて一様化してしまうことを控えるべきであると Niles は警告している。ここで言う「規範による一様化」の一つの方法は、「韻律を整えること」を指していると言ってもよいであろう。この点は、Fulk (1996) や Neidorf (2016) の立場と対立する面である。

Niles の本文校訂上の主眼は、作品の確固たる出所を示す明らかな証拠がない場合一例えば、‘orality’ に由来する場合など一は、古英語テキストの編者は作品に見出される韻律の不一致や、原則に捉われない韻律上の自由さを尊重し、これらを「人間の声の可能な標示 (‘possible signs of a human voice’)」と受け入れるべきであるとする (p.451)。その上で、「韻律による修正がなぜアングロサクソンの文脈で避けられるべきなのか」、以下、5つの理由を提示している (pp.451-2)。

- (1) 修正となると韻律の強制的な理論に応じて行うしかない。しかし理論は多くあり、どれを選ぶべきか判然としない。
- (2) アングロサクソンの韻律法というものは伝わっていない。古英語の韻律のほとんどの説明は記述的で必ずしも多くを説明しているものではない。(古英詩の oral / aural というリズム上の原則に相対して、韻律という文学的な概念が古英語の詩人にどれ程の意味を持っていたかという疑問)
- (3) 韻律によってなされた修正は、‘poetic license’ ということを無視している。(規範からの逸脱を認めない)
- (4) 現在の韻律理論が適切に扱っている資料は1%以上にも満たない。
- (5) 韻律的例外という指摘は、テキスト作成・テキストリーディングの過程の結果であって、‘singing’ と ‘listening’ のそれではない。

これら5点を再考慮すると、欠文・空白が写本に現れたり、明らかに意味の断絶が生じたりしているような限られた場合のみを除いて、本文を修正する必要はないとの保守的姿勢を Niles は採っている。中世の写字生を盲目的に重んじるからではなく、写字生が書いたものの中

に歌い手や話し手の言葉がまだ残っていることを重んじるからである。(p.453)

次に、Klaeber<sup>3</sup>(1950)とZupitza<sup>2</sup>(1959)を比較している。その結果、写本の読みにおける意味も統語も許容できるのだが、Klaeber<sup>3</sup>が修正している箇所が28あることを認め、これをNilesは、次の4つのカテゴリーに分類している(p.453)。

- (1) 行や一節の構成を満たすために半行全体、または複数の半行を補充する。
- (2) 頭韻と韻律をよりよくするために一語・一音節・数音節を半行に付け加える。
- (3) 頭韻をさらによくするために、一語即ち単一語を他のものと置き換える。
- (4) 音節の総数を満たすための小さな修正。

Nilesはこの各カテゴリーについて、具体的な関連箇所を取り上げながら、Klaeber<sup>3</sup>の本文の取り扱い方を検討し、新しい提案とコメントを与えている。Nilesの主張を追ってみよう。

(1)について(pp.454-6)：意味と統語が充足し、2つの主要な強音節が頭韻により結ばれる場合、あるいは前行から頭韻が継続しているならば、‘orphan verse’（半行が欠如しているもの）自体の自立をもっと重要視すべきである(p.454)。

Klaeber<sup>3</sup> (402-4):

Snyredon ætsomne, þa secg wisode,  
under Heorotes hrof; [heaþorinc eode,]  
heard under helme, þæ he on heo[r]ðe stod.

Nilesの提案—403bの[ ]の部分を省略。hrofの後の「セミコロン」を「コンマ」に直す。403a-4の3 versesは‘h’の頭韻の‘a pattern of rich alliteration (p.454)’となる。

(2) について (pp.456-7) : 次の半行における Klaeber<sup>3</sup> の補充は、*Beowulf* 詩人はいつも卓越した頭韻構造を保持し、4 つ以下の音節の verse は許容しなかったという信念に立つものである。

Klaeber<sup>3</sup> :

forðam [secgum] wearð (149b)	in ðam [guð]sele (2139a)
no ic þæs [fela] gylpe (586b)	ac unc [furður] sceal (2525b)
[æpeling] ærgod (1329a)	[fuglum] to gamene (2941b) g

コメント—詩人は時々頭韻と音節計算に頓着せず、意味が通る場合にはそれに満足していると Niles は考えている。

(3) について (pp.457-9) : 頭韻を整えるという理由によって、矢印右のように修正されている。

Klaeber<sup>3</sup> :

965a: handgripe → mundgripe      1073a: hildeplegan → lindplegan

コメント—写本の読みのままの方が好ましい。頭韻基準が簡単に満たされる場合であるが、詩人は頭韻には注意を払わず、これらの語をわざわざ用いたところに詩人の芸術性を示していると Niles は考える。

さらに、次の半行においても、正確な頭韻を満たす（ここでは、行の4番目の強勢のある語の頭韻は避けるという基準）ために修正が施されている。

Klaeber<sup>3</sup> (1151b):

heal hroden (hall adorned) → heal roden (hall reddened)

コメント—この修正によって詩人が意図した 'ironic' な文体的効果が失われてしまった。ここでは、Finn の館が多く「遺体で飾られた」という本来皮肉的な効果をもつ文脈である。

以下では、意味は通っているものの、語頭が 'h' で始まる語を母音で始まる語に変えてしまっている。これが Klaeber<sup>3</sup> の一つの特徴であ

る。

Klaeber<sup>3</sup> :

332b : æfter hæðelum frægn → æfter æðelum frægn

1541b : handlean (hand-reward) → andlean (reward)

2094b : hondlean (hand-reward) → ondlean (reward)

2929b & 2972b : hondslyht (blow delivered by hand)  
→ ondslyht (counterblow)

499a, 530b, 1165b, 1488a : hunferð (Hunferth) → unferð (Unferth)

コメント—母音で始まる語は、initial aspiration を持つ語と詩人は頭韻させていたとするなら、問題はない。‘Orality’ のコンテキストなら許容可能である。Hunferð, hunferð と写本にあるものを Unferð と ‘rename’ してしまっている。499b は強調の大文字の ‘H’ であるがこれも書き換えられている。この修正はどうであろうか疑問を呈し、写本通りで問題ないと Niles は主張する。

(4) について (459-60) : 半行に最低 4 音節が必要だという規則に基づく付加。

Klaeber<sup>3</sup> :

[Ge]grette þa (652a)

brad [ond] brunecg (1546a)

[swa] gegnum for (1404b)

hilderinc[a] (3124a)

コメント—このような規則の設定は現代的なものであり、アングロサクソン詩人にはそのような意識はなかったであろう。

以上のような分析を通して、Niles は次のような結論を引き出している。

(一) *Beowulf* が「人間の声」という第一手段でもって詩自体を伝えている方法（文体・レトリック・芸術美）は、教養ある者の手から作られるものと必ずしも一致する訳ではない (p.461)。

(二) *Beowulf* の読者として、私たちがこの詩にアプローチする方法には 2 つある。1 つは、詩を文学的・政治的・教育的目的に合うよう

に生み出された ‘textual document’ として捉えることである。2つ目は、*Beowulf* を詩として聞くようにする、すなわち、消滅してしまった「音の世界」に身を置くことである。テキストをコミュニケーション行為として再文脈化し、それによってどの程度、言語構造が ‘discourse’ (あるいは ‘orality’ と言ってもよいか) の圧力によって形成されるのか、認識することである。(p.461)

(一)、(二)を通して言えることは、*Beowulf* を「声の文化」の立場から見直すという必要性である。この視点は、本文批評の方法論とも密接に関わり、その新しい方向性に基づく本文決定が見られることになる。

### 1997: Fred C. Robinson

テキストの読みの決定は本文批評において、言うまでもなく重要な問題である。それは誰が担うのかと言えば、写本が残されている場合は写字生自身が第一のテキストの読みの決定者になり得ることもある。Kiernan (1981) はこの考えに立脚するものである。次の段階の読みの決定者は無論テキストの編纂者(校訂者)であり、その校訂本に依拠する読者の読みはそれに左右される。Robinson (1997)<sup>261</sup> の目的は、従来 ‘canon’ とされてきた *Beowulf* のテキストの Klaeber<sup>3</sup> (1950) に的を絞り、Klaeber によるテキストの諸相を検討することである。20世紀の研究は *Beowulf* 詩の ‘an established text’ という認識を増大させ、それを求めて20世紀は多くの editors の登場を見たが、その中で Klaeber 版が ‘dominate’ してきたし、今後もそうし続けるだろうと予測している。(p.46) そして、*Beowulf* 本文の主要な問題は Klaeber によって解決されたし、また詩の全体的構成は彼の edition によって決定されたということになっている。古英詩の標準版としての言語資料

---

<sup>261</sup> ‘Sir Israel Gollancz Memorial Lecture: *Beowulf* in the Twentieth Century’ in *Proceedings of the British Academy* 94 (London: The British Academy, 1997) pp.45-62.

(corpus) を出版するという意図をもった Dobbie 版でさえも、Klaeber 版に取って代わることはなく、このような意味で Klaeber の校訂本は、詩のテキストに関して私達の考えを固定化・限定化してしまう傾向があるという警告を示したのである。(p.47)

まずはパンクチュエーション中の「!マーク」の問題を取り上げている。その数の相違を他の校訂本と比較してみると、Wyatt (1898) の 11、Chambers (1914) の 10 に対して、Klaeber<sup>3</sup> は 55 であることを指摘している。(p.48) 「!マーク」自体には感情的な強調の意味合いが込められるので、本文にその要素がどこまで読みとれるか、その有無により私達が *Beowulf* 本文の読みを左右されかねない。次に、詩の語りの構造が Klaeber によって予め決定づけられてしまっている場合があるとする。それは、indentations が現れるところで、語りが異なる場面になると Klaeber 自身が考えたところに用いられているが、しかしこれを用いる原則については edition のどこにも触れられていない。そして 106 の indentations が Klaeber<sup>3</sup> には用いられ、このような構造上の markers は後々の校訂者が依拠する ‘canonical status’ となってしまうと Robinson は指摘する。(pp.48-9) 次に、詩に付けられたタイトルの問題がある。タイトルはもちろん ‘a modern invention (p.49)’ であり、これはテキストが読まれる前に読者に先入観を与える可能性があるとする。現存する写本の古英詩にはほぼいつもタイトルは付されておらず、古英語の文学は「個」を主張するといった伝統を持ち合わせていないからである。

続いて Robinson はグロッサリに目を向けている。グロッサリは、アルファベット順にはなっているものの、テキストにおける一個人の翻訳以外の何物でもないとし、詩の一つの任意な解釈を読者に強いるものであるとする。(p.50) Robinson は *āglæca* の例を取り上げている。この語は *Grendel*, *dragon*, *Beowulf*, *Sigemund* を指す文脈に現れるが、Klaeber は主要な語義として、‘wretch, monster, demon, fiend’ を与え、その場限りの意味として、‘warrior, hero’ を与えている。Robinson

は *Dictionary of Old English* の ‘awesome opponent, ferocious fighter’ の語釈に依拠し、この語は単に ‘assailant, fierce combatant, antagonist’ と取るのが妥当で、これなら ‘hero’ にも ‘monstrous adversity’ にも適用できると主張する。(p.51) また、fah という語に Klaeber は ‘blood-stained’ の語義を与えたことにより、‘adorned (with blood)’ の比喩的表現が隠されてしまったとする。(p.51) さらに、gēomēowle は ‘woman of old, woman of a former day’ であるのに、‘old woman’ としてしまい Ongentheow の妻の描写を誤ってしまったと述べる。(p.51) このように Klaeber の私的な語義解釈が反映されており、そのまま受け入れることには注意を要すると言える。

次に Robinson によって指摘された、‘crux’ に関わる Klaeber の写本の読みの対応を一つだけ見ておこう。それは以下の 746-8 行目の部分である。

Klaeber<sup>3</sup> (746-8):

nam þā mid handa      higeþihtigne  
rinc on ræste,      ræhte ongēan  
fēond mid folme;

写本を確認すると、ræste の後の行末の部分はいくつか、あるいは部分的に削り取られた文字の跡がある。但し、最初の文字は h であることがはっきりしており、実際の写本の読みは h . . . ræhte ongēan である。Klaeber はこの写本の証拠を無視して、誤った verse を確立してしまったと Robinson は判断している。(p.56) そう指摘する理由は、(1) ongēan の目的語がない、(2) ræhte ongēan は ræhte の前に強勢のない音節部分が見出せないなのでこの半行は韻律的に短い (p.56)、ということである。そこで、もし写本の h を him と推論すると文法的にも韻律的にも完成すると Robinson は述べ、その推測形を支持する根拠を次のように展開している。

写字生の誤りの過程は次のように起こったと思われる。部分的に削除

された h の後に a が続いている。写本の前行で、削除部分の上、右の方に han という handa の第一音節部の文字がある。写字生は him と書こうとした時、手本の handa が目に入りそれを書いてしまった。間違いに気づき、語頭の h を残して anda を削除した。後に、この h から続けて him と書こうとしたが訂正をし忘れてしまった。この論理立ては、統語・意味・韻律・痕跡の証拠によって裏付けられる。(p.57)

こう述べた後に、Klaeber が写本の証拠を考慮せずに一節を校訂している時、「Klaeber の表面上の権威 ('the seeming authority of Klaeber', p.57)」から自分たちを解放することが Klaeber を訂正する第一歩となるだろうと主張している。

もう一つ Robinson が問題視しているところは、Klaeber による「キリスト教的要素の読み込み」という点にある。聖書と類推できる所の詩の節はそれと関連付けてことごとく項目化し、キリスト教的要素を強調した。そのことが *Beowulf* を *Christian Beowulf* にし、かつ世俗的・前キリスト教的要素を否定する学者の後ろ盾となっている事実を認めている。(p.59) しかし、気高い異教徒ならキリスト教徒と共有できる自然の普遍的な知があると Robinson は反論している。(p.60) この見解は、Robinson の言う 'appositive style'<sup>262</sup> である。

最後に Robinson は、Klaeber 時代には起こり得なかった textual criticism に貢献し得る以下のようなさまざまな成果を例示している。(pp.61-2)

- (1) *The Dictionary of Old English* 編纂による古英語の語彙の詳しい分析
- (2) Jane Roberts and Christian Kay's *Thesaurus of Old English*
- (3) Kiernan's compact disk version of the *Beowulf* manuscript (Klaeber の校訂上の方法論の弱点は写本研究に関してである)

---

<sup>262</sup> F. Robinson, *Beowulf and the Appositive Style* (Knoxville: The University of Tennessee Press, 1987) を参照。

- (4) James R. Hall の徹底した ‘analysis and collation of the early transcripts and early collations of the manuscript by scholars like Thorkelin, Conybeare, Grundtvig, Kemble, Madden and Thorpe’
- (5) Mitchell’s *Old English Syntax* と Mitchell の古英詩に関わる punctuation の guidance

これらが、21 世紀には Klaeber の *Beowulf* ではない新たな *Beowulf* を生み出すであろうと予測している。

### 1997: R.D. Fulk (I)

Fulk の本論文<sup>263</sup> は *Beowulf* に関する本文批評の歴史を概観しながら、基本論考を与えたものである。最初に次のような論の梗概が述べられている。

19 世紀においては、テキスト校訂に関しての姿勢や実践は現代以上に多様であった。ところが、‘liberal emendation’ の擁護者は 20 世紀の初期までにその姿勢が覆され、今日用いられているテキストは ‘moderate’ から ‘conservative’ の慣行を反映したものとなっている。近年では ‘ultraconservatism’ の姿勢が校訂に際し主流を占めるようになってきていると思われる。このような姿勢は、一般的なテキスト理論の近年の傾向と対立し、また聴衆とテキストとの関係、校訂上の決定をなす際の確率性の判断方法などを除外している。しかしながら ‘conservatism’ は今後も優位を占め続けるであろう。(p. 35)

Fulk の姿勢は ‘conservative’ 志向とは反対を向くものである。具体的には韻律から得られる確率を尊重し、本文介入を積極的に進めていく方向性を一貫して唱えている。続けて、Fulk の見解を追ってみよう。*Beowulf* の校訂の歴史は、自分たちの作品に訂正を導入した写字生自身に始まり、その結果、詩の本文批評の論争はこれらの最初に知られ

---

<sup>263</sup> ‘Textual Criticism’ in *A Beowulf Handbook*. Ed. by Robert E. Bjork and John D. Niles (Lincoln: University of Nebraska Press, 1997), pp. 35-53.

た校訂者（写字生）の権威と現代の校訂者の権威を対峙させるという傾向を辿ってきたという。(p.37) そのような展開の中で、19世紀の本文校訂の歴史は、保守的実践が果たして見識あることかという論争を写し出しているとし、テキストを修正しようという衝動は、Karl Lachmanのような古典学問に見られる本文批評の新しい方法論から支持を得たとする。(p.38) そこで、修正する際の一般的理由の根拠を4つの項目に範疇化している。すなわち、(1) 文法・(2) 頭韻・(3) 韻律・(4) 意味で、これらを確立する必要性を説いている。(pp.38-9) 言うまでもなく、この4項目は主要な校訂本を導く際の重要な役割を果たしてきた基準である。

次に20世紀の初期に目を移し、その期には本文批評の論争は校訂本という形式をもって行われたことを述べ、特に Grein (1857)<sup>264</sup>, Heyne-Schücking (1908)<sup>265</sup>, Wyatt (1894)<sup>266</sup> の保守派から Trautmann (1904)<sup>267</sup> の自由な推測による校訂派に跨って展開されたことを指摘する。(p.43) また、*Beowulf*は話が合成されたものから成るとする理論が19世紀の総意であって、これが *Konjunkturfreudigkeit* を可能にし、*Liedertheorie* ということと、残存しているテキストを尊重しないという関係は、Hermann Möller (1883)<sup>268</sup> の原テキストを344の4行連詩に

---

<sup>264</sup> Grein, Christian W.M. ed. *Bibliothek der angelsächsischen Poesie in kritisch bearbeiteten Texten und mit vollständigem Glossar*, Bd. 1. (Göttingen: Georg H. Wigand, 1857).

<sup>265</sup> Moritz Heyne, ed. *Bēowulf. Mit ausführlichem Glossar*. Achte Auflage, besorgt von Levin L. Schücking (Paderborn: Druck und Verlag von Ferdinand Schöningh, 1908).

<sup>266</sup> A. J. Wyatt, ed. *Beowulf* (Cambridge: The University Press, 1894).

<sup>267</sup> Moritz Trautmann, ed. *Das Beowulflied: Als Anhang das Finn-Bruchstück und die Waldhere-Bruchstücke* (Bonn: P. Hanstein's Verlag, 1904).

<sup>268</sup> Hermann Möller, ed. *Das Altenglische Volksepos in der ursprünglichen strophischen Form*. I. Teil: Abhandlungen. II. Teil: Texte. *Das Beowulfepos mit den übrigen bruchstücken des Altenglischen Volksepos in der ursprünglichen strophischen Form* (Kiel: Verlag von Lipsius & Tischer, 1883).

再構成したことの中にと、Ludwig Ettmüller (1875)<sup>269</sup> のキリスト教要素の挿入を削除した 2896 行の校訂本の中に鮮明に表れていることを見ている。しかしながら、保守派が優先的になったのは、Trautmann の校訂本への批判が契機であったとする。(pp. 43-4) その保守的校訂姿勢の代表者として、Fulk は Kiernan (1981) と Tripp (1983)<sup>270</sup> を挙げ、Kiernan の「今必要とされているのは、新しい真の保守的校訂本である (1981, p.278)」との主張を引用している。Fulk 自身は、この見解は多くの信頼を勝ち得てはいないとの判断を下している。(pp.44-5)

次に中世期の口承文学という観点から考察を施している。韻律の規則性は口承文学作品の中に当然現れるものと想定すべきではない、さらには、頭韻は必ずしも必要条件ではないとする見解もある。この想定は、韻律と頭韻の関連ある統一性は ‘literate texts’ の本質に属するものである、ということに基づいている。しかしながら、*Beowulf* の 3182 行中、半行間において頭韻結合 (‘alliterative link’) を欠いている箇所は 37 あり、その 37 の内 23 において、頭韻に関し修正すると、韻律・文法・意味面で改善することが出来る。頭韻の欠如と本文上の問題との一致が見られ、このようにしてみると、形式上変則的な ‘original’ が残ってきたとは考えにくいと推断する。(p.46) この点は Niles (1994) の見解に相對する。

続けて、本文を保持するという保守主義の姿勢に懐疑的な Sisam (1946: repr., 1953)<sup>271</sup> に触れ、その Sisam の見解とは異にする一人として Franzen (1990)<sup>272</sup> を対峙させている。また、写字生は不注意な変更

<sup>269</sup> Ludwig Ettmüller, ed. *Carmen de Beowulfi Gautarum regis rebus praeclare gestis atque interitu, quale fuerit ante quam in manus interpolatoris, monachi Vestsaxonici, inciderat.* (Zürich, 1875).

<sup>270</sup> Raymond P. Tripp, Jr., ed. *More about the Fight with the Dragon: Beowulf 2208b-3182, Commentary, Edition, and Translation* (Lanham, MD, New York and London, 1983).

<sup>271</sup> 網代敦「古英語の本文批評と *Beowulf* (7)」大東文化大学英米文学論叢第 43 号 (2012), pp.77-9 を参照。

<sup>272</sup> 網代敦「古英語の本文批評と *Beowulf* (9)」大東文化大学英米文学論叢第

を犯してしまいがちながら、自国語の韻文を無関心に転写していたのではなく、転写する際に自分たちが本文を書き換えるのを許されていた当時の詩の伝統に従っていたことを示した O’Keeffe (1990)<sup>273</sup> の見解にも触れている。Franzen や O’Keeffe の本文介入を控える学者たちの校訂上の原則と実践については、必ずしも一致は見られない。しかし、「統一された ‘original text’ は復元され得ない」という共通した見解があり、それ故「写本本文はそれ自体正当性がある、換言すると、いかなる再構成における正当性よりも、前者の正当性のほうが上である」という考えを彼らは尊重していると Fulk は断定する。この解釈について、Fulk は ‘original text’ に焦点を当てることは不幸であるとする。(p.46-7) この他に、イタリックスやかぎ括弧などの記号を使用せず、かつ本文自体の変更もせずにページの下に写本の読みを置いている点で客観的と言える *ASPR* (Krapp and Dobbie) の校訂本、それに対して、余剰母音の下に付されたドットや縮約されていない母音や二重母音を示すために付された曲アクセントを使用した Klaeber の校訂本などへの比較言及がある。(p.49)

いずれにしても、どの校訂本も、最も保守的なものでさえも本質的には解釈されたものと Fulk は見なしている。(p.50) というのは、punctuation 一つを加えただけでも、そこには意味への影響が生じるからである。語釈の面では、例えば Klaeber のグロッサリは、彼の本文変更の総数よりもっと大きな詩の解釈において影響を与えていると Fulk は述べる。また批評的校訂本 (critical edition) の目的は、ファクシミリではできなかった、本文を近づき易いものことにあり、それによって、校訂本はどのくらいの解釈を与えるべきなのかが関わってくることになる。要は、批評的校訂本はある特別な目的に、そして特定の読者に適した意図を持つものであり、その目的の必要性和読

---

45号(2014), pp.77-8を参照。

<sup>273</sup> 網代敦「古英語の本文批評と *Beowulf* (9)」大東文化大学英米文学論叢第45号(2014), pp.76-7を参照。

者を考慮せずには構成できるものではない (p.51) というのが Fulk の見解である。

(次号に続く)